

4・陸前高田市の仙台藩気仙郡大肝入吉田家の文化財レスキュー

佐々木 勝宏 岩手県立博物館 主任専門学芸員

1. 大肝入吉田家

大船渡市(旧三陸町含む)・陸前高田市・住田町・釜石市唐丹は、藩政期には仙台領で24箇村からなる気仙郡であった。郡奉行や代官のもと、村方役人最上位の大肝入は実質的に郡内を統括し、名字帯刀を許され、役料を与えられた。元和6年(1620)に、初代宇右衛門(筑後)が伊達政宗から大肝入に任命され、明暦から元禄に矢作久右衛門と、元禄から宝永に松坂十兵衛が務めた時期以外は、吉田家歴代当主が宝永以降慶應まで気仙郡大肝入を務めた。現当主は15代目である。寛延3年(1750)以後は、執務日記『定留』(御用永留・永留)を記録し、保管し続けた。飢饉対策や藩との連絡調整など、大肝入がなすべき任務内容を前例によって学べるよう頭書という索引も備えていた。郡内の生活を支える知恵が蓄積された貴重な史料である。また吉田家住宅は大肝入屋敷の形態を伝える数少ない遺構で、主屋は天保9年(1838)の巡見使や嘉永5年(1852)の領内視察の藩主慶邦の宿泊所として使用され、味噌蔵、長屋、土蔵とともに維持管理されていた。明治3年(1870)以降、大肝入は大庄屋と改称された。「大庄屋」とは主屋の呼称でもあり、吉田家の屋号ともなった。近隣住民は尊敬の念を持って、主屋の葺き替えや、庭の手入れなどの協力を惜しなかった。文化財レスキュー後の吉田家文書の修復、吉田家住宅の復元とともに、吉田家を中心に形成されていたコミュニティの復活を願いつつ、吉田家関連文化財レスキューについて経過をまとめておきたい。



被災古文書など



洗浄後のエタノールかけ作業

2. 吉田家文書

寛延3年(1750)から明治元年(1868)まで記録保管されてきた気仙郡大肝入執務日記『定留』や索引目録とも言える『頭書』、気仙郡村絵図などは、平成元年(1989)に陸前高田市立図書館に寄託され、平成7年(1995)に岩手県指定文化財となった。その数は約150点にのぼる。今回の震災で文政5年(1822)に藩へ提出した各村絵図など寄託されていたものは救出され、修復作業が続いている。藩からの諸経費負担の割り当て、軽犯罪者の処分など、その内容は多岐にわたり、大変興味深く、研究素材の宝庫とも言える。デジタル映像化や解説、抜本的な修理などによって、あらゆる分野の研究が進捗するきっかけにし

たいと思っている。残念ながら土蔵に保管されていた伊達政宗黒印状や嘉永5年(1852)の伊達慶邦公出馬宿割絵図などは現在も発見されていない。

3. 吉田家住宅

東に大手の門があり、板塀や生垣で囲まれていた。主屋は、享和2年(1802)の建築で梁行5間桁行13間半ある。東側に三間続きの座敷があり、賓客の宿泊所として使用され、御座の間部分が南側に突き出ている。月見の池が設えてあり、南側の諏訪神社の麓まで植栽の庭だった。御座の間後方には賓客用の風呂と便所があり、納戸を挟んで中央部には執務や居住空間

の二間があり、西側には板敷の台所と土間や釜屋が続いた。西側2階には外からはわからない座敷二間があった。嘉永5年(1852)の屋敷絵図だと北側に折れて突き出した部分に御台所と風呂場があった。被災直前の状態にいつ頃なったか伝わらない。土蔵は梁行3間桁行6間の2階建て。壁厚30cmほどで、白漆喰壁で腰回りは海鼠壁。黒印状や絵図のほかに、未調査の饗応に使われた漆器や陶磁器などが保管されていた。寄託される以前は『定留』などの古文書もここに保管されていた。引き出しや押し入れを備えた見事な造りであった。主屋西側にほぼ南北一直線上に北から土蔵、納屋、木小屋、味噌蔵と並んでいた。納屋は梁行2間桁行9間で馬屋使用の形跡があった。味噌蔵は梁行2間桁行3間半の2階建てで壁厚15cmほど。土壁下地仕上げだった。嘉永5年の屋敷絵図には同じ位置に土蔵、長屋、味噌蔵が描かれて、修復の手は入っているだろうが、建築そのものは嘉永5年以前の可能性が高い。この4棟が平成18年(2006)に岩手県指定文化財となった。これらを火災から守るため、今泉の屋並みは舁型の道沿いを瓦葺白漆喰海鼠壁の土蔵で囲み、歴史的景観をつくりあげていた。



吉田家住宅主屋（北東から）



吉田家住宅土蔵（南東から）

4. 吉田家文書の救援活動

吉田家文書の大半は、陸前高田市立図書館の重要書庫で被災した。津波は2階建ての建物を飲み込み、鉄筋コンクリートの壁と床を残して根こそぎ持ち去った。書庫が鉄扉だったので流出は免れた。津波による松葉・ガラス片・砂泥にまみれて真っ黒だった。震災発生から20日ほど経過し、自衛隊により基幹道路国道45号線上の瓦礫が撤去され、道路沿いから順次、瓦礫や残存建物内へと遺体の捜索や収容の作業が進んだ。文書類の救出依頼は陸前高田市から、大船渡市立博物館へ、そして一関市博物館を経て当館に連絡が入ったのは3月末だった。ガソリンは入手困難。避難所への救援物資輸送が最優先の時期に文化財レスキュー活動に躊躇はあった。緊急車両と救援物資運搬の許可車両以外は、被災地に向かう道路は通行制限されていた。人命救助と遺体捜索。避難所への物資補給が充分でない被災直後には文化財レスキューなど出来るはずもなかった。東北本線沿いの被害の少ない地域から被災地への距離は100km前後あり、規制のない山越えの細道を通って行けても復路分は給油が望めなかった。東北の物流の根幹である仙台市も被災しただけに救援活動自体があまりスムーズに進まず、文化財レスキューはさらに遅れることとなる。遺体発見現場での献花の菊が黒っぽい瓦礫の中で鮮やかで、その数の多さが被害の甚大さと悲慘さ深刻さを知らしめていた。広い共通駐車場を持ち集約的に建てられた市立体育館、公民館、図書館、博物館、埋蔵文化財収蔵庫。避難所だった体育館も津波に襲われ多く犠牲者が出た。この遺体捜索のために道が造られ、図書館や博物館に近づけるようになった。陸前高田市の職員や陸前高田古文書研究会の会員によって仕分けされ、袋詰めされた古文書や市史編集資料(近代の旧町村の公文書など)を建物の外に搬出した。天井に突き刺さった瓦礫に気をつけながら、海岸から直接吹きつける潮風による砂塵が時折巻き上げるなか、ヘルメット、ゴーグル、マスクをつけて救出作業を続けた。4月2日と3日の2日間で概ね当館への搬出は完了した。電気、水道、トイレがないなか日没まで作業は黙々と続けられ、当館車庫に搬入したビニール袋は860余。『定留』などは一関市博物館で真水に二日漬けられて当館に移送されてきた。その数の多さに圧倒され愕然とし、放心状態になりかけた。作業工程を話し合い、文書の修復作業が手探りで始まる。公益財団法人岩手県文化振興事業団の埋蔵文化財センターと当館で、被災古文書等を折半して脱塩、洗浄作業を開始。試行錯誤を重ね、次第に必要な技術を習得し、使いやすい道具を入手。作業効率も高まった。しかし、人手不足は深刻だった。震災の影響で、新年度の講義の開始が遅くなった岩手大学教育学部や盛岡大学文学部社会文化学科の大学生の献身的なボランティアによって作業は軌道に乗った。4月中旬に入ると急な気温上昇により、当初の青黴だけではな



吉田家住宅主屋の屋根の萱の山



パイプハウスと雨曝しの部材



パイプハウスへの部材の搬入保管

く、白黴が発生した。溜水での汚れ落とし。流水を少しずつ入れて泥や砂落とし。箆に入れブロックで重しをかけての水切りと整形。超音波洗浄機での洗浄、アルミ箔に包んでの予備凍結。

冊子ものには乾燥後の頁を剥がしやすくするため、クッキングペーパーを挟み、真空凍結乾燥機へ送り込んだ。保護に巻いた薄葉紙のはぎ取り、ページごとに竹箆で開いて刷毛でのクリーニング。軽微な貼り付けには新古糊を用いた。並行して5月は陸前高田市立博物館の救援活動があった。吉田家のそばにある旧代官所跡地の公民館の基礎部分に引っかかって流れ着いた大きな梁材などが見える土壁下地仕上げの土蔵があり、吉田家の味噌蔵と思い、当主の許可を得て和紙に墨書された文書を中心に救出。それ以外のものは、蔵から放り出されて空になった長持のなかに入れて文化財であることを記して帰館した。残念なことにつぎの救助活動の際は無くなっていた。この時の物は吉田家別家下屋敷（気仙小学校付近）の物であることがわかり、このほかに家人が救出した物の中から明治期に地方自治で活躍した吉田弘二氏の資料の救援を託された。蝦夷地地図や製糸工場の見取り図なども含まれていて、吉田家文書とともに洗浄や修復作業を行っている。クリーニング終了後は、名前をつけた中性紙封筒に入れ、中性紙保存箱（文書箱・大）で102箱になった。岩手県立図書館に一部保管を依頼するため、明治以降のものを図書館に、藩政期以前のを当館で保管する予定で分別している。

5. 吉田家住宅の救援活動

仙台藩領内における大肝入屋敷の遺構はほとんどない。嘉永5年屋敷絵図にはすでに主屋、味噌蔵、納屋（長屋）、土蔵の位置に同様の建物が描かれている。吉田家建物群は当時の状態をよく伝えていた。5月になると埋蔵文化財収蔵庫は考古部門、海と貝のミュージアムは生物部門というように分担できるようになり、歴史部門は民俗部門の協力を得て、吉田家の土蔵で被災した政宗黒印状などの県指定文化財を捜索し、主屋の部材を回収すべく、市教育委員会に依頼し、萱の山々をテープで囲み、文化財があるので瓦礫と一緒に撤去しないように表示した。これが5月9日だった。6月に入って蠅が大量発生するなか、市から提供してもらった瓦礫撤去作業用の重機一輛を活用し、県教育委員会生涯学習文化課と当館学芸員の立会いのもと煤で黒くなった手斧痕の残る萱の山に見え隠れする主屋の部材を延べ14日間で回収し、10メートル四方2枚のブルーシートの上に部材を集めた。7月29日に間口2間半奥行8間のパイプハウスの無償提供を受けて設置し、随時災害ボランティアの人力でハウス内に搬入した。全部材の三分の一しか納まらず、11月に発足した〔今泉復興の会〕に立命館大学高木研究室から資金援助を得て、間口2間半奥行8間と間口2間半奥行4間のパイプハウス2棟が12月24日に完成し、回収部材のハウス内への搬入保管が終了した。八戸工業大学大学院月館敏栄教授の指導のもと、部材の洗

浄、拭き取り、採寸、墨書確認、写真撮影をして、バーチャル復元の材料とすべく、極寒の時期なので部材を傷めないように慎重な作業を続け、平成24年1月と2月の4日間で百本の部材調査が終わった。高圧洗浄機などの機材は立命館大学と八戸工業大学から提供いただいた。今泉の町並みや吉田家住宅の復元に向けて東北工業大学の高橋恒夫教授からもご教示いただきながら、部材の確定や補材づくりなど、一連の部材調査が終われば、部材復元に進むことができる。市の復興計画の推進にともない、どこにどのように復元し、活用するのか叡智を結集し、検討を重ねなくてはならない。平成24年の春からは建築を専攻する学生ボランティアの協力を得て、平成24年度内に回収部材の調査を完了させたい。まだ八分の一程度しか終わっていない。

6. 現場のねがい

救援委員会による物資提供や技術的な助言、作業内容の確認、激励のことばには大いに勇気づけられた。ただ「救援要請がないと動けないのです。救援要請がほしい。」という言葉には、すんなり納得ができなかった。災害発生時に相談する窓口があって、支援体制を組むために現地にすみやかに専門職員の派遣要請が出来る、あるいは要請がなくても視察者を派遣できる制度や仕組みがあれば、もっと迅速に救出ができ、救出する量を増やし、その質を高めることができた。「泣かぬ赤子に乳は与えず」では、被災文化財の救出など出来っこない。泣く力がない赤子や助けを求めることが出来ない、乳が出ない母親はどうすればいいのか。岩手県沿岸の被災市町村数は12。文化財担当専門職員がいない、あるいはごく少ない中で、仮にその職員が幸い生き残ったとしても、文化財の仕事より人命確保、生活維持の仕事が優先される。文化財には手は回らない。ましてや支援すべき県職員のいる県庁所在地から被災地までなかなか出向けない場合はどうするのか、県庁自体が被災した場合はどうするのか。被災状況を把握して、救援委員会に救援要請をするというのは現実的ではない。災害が起こったら、被災者が助けを求めなくても、周辺からの要請で、または煙を見て警察や消防のように消火や人命救助に出動してほしい。助けに来るのは被災していない地区の被災していない人間であるべきだ。

神戸は地震と火災はあったが、津波はなかった。今回の被害は地震ではなく、津波被害が甚大なのに「阪神淡路大震災のときは」という発言や、それを基準にする考えは無理が多く、まったく違う物差しを押しつけられた感じがした。神戸には大阪があり、周辺は都市部。雇用の場もあり、各年齢層がそろっている。周辺には復興への大きな原動力があった。それでも、復旧復興に20年近くがかかった。今回の被災地には安定的な雇用

が少なく、仕事を求めて働き手は外に出て、ふるさとの生活を支えている状態で、少子高齢化と過疎化が急速に進んでいるなかでの被災だった。復興活力源が阪神淡路大震災とは比較にならないほど小さいということをもっと認識してもらいたい。

文化財のレスキュー活動も救援要請の有無にかかわらず、手を差し伸べる、すぐに現地の調査に出動する体制がほしいと強く感じた。